

副主任コラム 10月号

副主任 澤井 良子

今月から、「このページを使って、感じたこと、思ったこと、保育の日常であったことなどを書いてみたら？」と園長先生にお話を頂き、正直何から書いていこうか迷いましたが、私なりに思ったことを綴っていこうと思います。

私が副主任になり1年4か月経ちました。毎日色々なクラスの様子を見にいたり、時には、休みの職員の代わりにクラスに入ったりしています。子ども達も私がお部屋に入ると「今日は〇〇先生休みだから、澤井先生だね」と声を掛けてくれます。「先生は〇〇先生の代わりだから、お給食の準備だよ。お当番は、△△ちゃん」と、子ども達は職員の動き（役割）もよく分かっています。

ある日の異年齢での給食の時間。今はコロナの事もあり黙食、そして決められた席で食べているのですが、黙って食べている中で年長さんの女の子が、隣に座っている年少さんの男の子のフォークの持ち方に気付き、指で無言で正しい持ち方を教えてあげていました。男の子は『?』という表情をしながらも、何度も年長さんの女の子の持ち方を除き込んで、持ち方を直そうとしている姿をみて、こんな状況の中でも子ども同士の育ち合いってあるのだなと思って私は見ていました。

そして、あるクラスでは「嬉しかったこと、悲しかったこと、楽しかったこと…」など帰りの時間に、子ども達が自分の口でみんなに伝え、その言葉に保育士、子どもと一緒に共感している場面を見ました。『何を話してもいいんだよ』という、その場の空気、人が子ども達の自由な思いを伝えられる環境になっているのではないかなと感じました。1人1人同じ人はいないように、思うことや感じることに間違いなどないのです。だから自信をもって言ってみようかな？と思う体験の積み重ねは大事だと思います。それが年齢問わず増えていけるように、どのクラスの職員も子どもの声を大切にしています。

今【見守る保育】を、ながさわ保育園では取り組んでいますが、この見守るは、ただ子どもを見ているだけでなく、意識的に少し離れたところから子どもを見て、ひとりひとりが出すサインを見逃さないようにし、必要な時に必要な援助をして子どもの能力や発達を妨げないような関わりをすることです。なかなか難しく、子ども同士の関わりの中でも「今行こうかな（声かけようかな）、もう少し見てようかな？」と私たちは心の葛藤です。それが子ども同士で解決出来ている場面をみた時、子どもの育ちを目にして嬉しくなります。

もちろんうまくいく日ばかりではないですが、子どもたちが自由に相談したり、遊んだり、考えたりする環境や、人、場所があれば、子ども同士で成長していけるのではないかな…と感じたりもします。一緒に子どもの思い、考えに寄り添いながら学んでいけたらと思います。